

博報財団 第12回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名	COOK Ryan Marshall (クック ライアン マーシャル)
在住国名	アメリカ
所属・役職	エモリー大学映画メディア学学科・助教授
招聘回(招聘研究期間)	第12回(2017年9月1日～2018年8月31日)
受入機関	立命館大学
招聘研究テーマ	日本映画を通じた1960年代の考察—イメージ及び記憶としての昭和30年代
研究目的	出版物原稿の作成
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか(具体的に)</p> <p>今年一年間の研究活動はおおよそ三つの種類に別けられます：</p> <p>①一時資料(映画を含む)の収集、参考、②フィールドワークや見学、③学者との交流</p> <p>①はほとんど大学の図書館で行いました。1960年代の映画雑誌(キネマ旬報、映画芸術、映画評論)を中心に、当時の映画、大衆文化、芸術などを巡る批評、評論の状況を調査しました。立命館大学以外に、神戸映画資料館や早稲田大学の坪内演劇博物館で研究検索を行いました。古本屋も役に立ちました。</p> <p>②は主に施設への見学という形で行いました。大阪万博は日本に来てから研究対象の一部になり、大阪万博記念公園へ数回も見学しに行きました。今年40年ぶりくらい復元して再開された太陽の塔も入ることができました。日本映画の演劇様式への関係を研究しながら国立文楽劇場も数回も幕見しに行きました。神戸の横尾忠則現代美術館も京都や大阪の資料館や映画小屋(京都の文化博物館、出町座や大阪のシネヌーヴォ)などにも通いました。昭和時代の魅了というテーマを参考するには、昭和レトロのスポット(下町風俗資料館から半兵衛大衆居酒屋や東京の有楽コンコースまで)見に行きました。</p> <p>③は学会参加で行いました。立命館大学を始め、同志社大学、京都大学での学会に参加して、京都の学者達との交流ができました。名古屋大学、明治学院大学、早稲田大学のイベントにも参加し、山形国際ドキュメンタリー映画祭にも参加できました。大阪大学で自分の研究を発表することもできました。そちらの相手と話し合いながら研究への新しい観点を獲得できました。</p>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)</p> <p>日本の1960年代大衆文化論について調査しながら、それは1930年代までの大衆文化論に似ていることに気がつき、映画という大衆的な見せ物がある観点からみると1960年代で戦前の文化的なテーマに甦らせる現象になったことを新しく結論できました。日本の場合を同時に行っていた戦後イギリスのCultural Studies学派とも比較するようになりました。この観点で「思想の科学」や鶴見俊輔の大衆文化論が中心になり、特にその「限界芸術論」で、当時の大衆文化、伝統としての「国家の文化」、そして戦後制度を象徴する消費文化の関連が如何に分析されたかについて興味を持つようになりました。大衆文化は伝統芸術の様式主義や資本社会の日常生活環境を結びつける可能性があるという結論が興味深いと思いました。そして、鶴見氏が「ベ平連」の反ベトナム戦争の活動などで新左翼に重要な役割を果たしたこ</p>	

とを知り、その大衆文化論を政治的な文脈で考えるようになりました。大衆文化が当時文化的な意味での「価値の再分配」として論じられたという解釈ができる気がつき、論文の総合的な形が見えるようになりました。

大衆文化としての1960年代日本映画を研究しながら、いくつかの点で新しい知見を得たと思います。例えば、歌謡映画や映画の主題歌を研究しながら、当時の映画産業と音楽レコード産業が並行的に変化してきたことに気がつき、映画や音楽のジャンル変化も並行的に分析するようになりました。東映任侠映画や日活アクション映画が演歌という新しいレコードジャンルとほぼ同時に発展させられたことに興味をもち、その関連について考えるようになりました。

政治運動、芸術のアヴァンギャルド、大衆文化の三つの分野に別けられがちな1960年代文化環境をその各部の相互関係で再考することで、芸術としての映画と見せ物としての映画との関係も調査するようになりました。そこで「ヌーベルバーグ」という独立的な立場を目指していた映画と、大手映画会社が量産的に制作してきた娯楽プログラムピクチャーを比較して分析してきました。大手映画会社の「製品」は以外と「ヌーベルバーグ」作品に共通点が多く、大衆文化と芸術の限界をぼかす作品も少なくなかったと考えるようになりました。それで、大阪万博はそういった文化的な接点をまるで激突のように演出したと考えるようになりました。万博は国家、産業、芸術、そして大衆を「進歩と調和」という発言で纏めようとしたが、「万博粉碎」などの万博を巡る文化的な争いを調査しながら、それはいかに調和させられがたいものでしたか分かるようになりました。

3. 研究成果(予定を含む)

○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))

・"Casablanca Karaoke: The Program Picture as Marginal Art in 1960s Japan," The Japanese Cinema Book, British Film Institute, 12月掲載見込み、内容はムード歌謡映画を西洋映画のリメイクとして分析し、「本歌取り」に例えられる様式主義がこの大衆映画を下敷きしたと主張します。

・"Oshima Nagisa," Oxford Bibliographies in Cinema and Media Studies, Oxford University Press, 2018年9月掲載、内容は大島渚という映画監督の全貌であり、大島について発表されたあらゆる書物を紹介します。

○口頭発表(題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略(200字以内))

・文学と映画を横断する一型としての歌謡映画、日本比較文学学会、4月・大阪大学、内容は鶴見俊輔の「型」という概念の使い方やその大衆映画への関連についてでした。

・The Promise of Popular Culture: Rethinking Japan's 1960s through Film, Japan Foundation Speaker Series, 2018年9月20日・Univ. of North Georgia、内容は昭和時代の歴史観と大衆文化との関係についてです。

4. 今後の活動予定

本の原稿は執筆し続けて、秋以内完成し出版社へ送るつもりです。論文の一部を British Film Institute により掲載する予定があります。研究資料を大学の教材としてまとめたり翻訳したりする予定もあります。